

類題発句集における芭蕉の受容(二)

— 芭蕉の〈通り句〉の分析と存疑句の派生 —

東 聖子

序

ゲートは『東西詩集』⁽¹⁾において、こう語る。

詩人のことばは天国の門にただよい

不滅のいのちを求めながら

いつも軽く扉を叩いていることを

(詩人の書)

詩人のきよらかな手が掬えば

みずは水晶の玉になる

(歌とかたち)

この『東西詩集』は、大部分は一八一四か一八一五年に作られたという。そうして当時詩聖ゲートの詩精神が極度に東方へ傾斜していたといわれるが、それは高度なひとつの詩的達成であった。

俳諧という東洋における日本の短詩型文学には「季の詞」という特別の〈詩の詞〉があり、その詩には水晶のごとき〈珠玉の詞〉がちりばめられている。形は違っても、ゲートの〈詩人のことばに對する純粋な鍊磨の姿勢〉は同様であろう。

前論文では次の事柄を、テーマとして考察をした。

類題発句集における芭蕉の受容(一)

— 芭蕉の〈通り句〉について —

序

一 其角「芭蕉翁終焉記」における芭蕉句

二 《百人一句》類における〈通り句〉

三 四つの類題発句集

四 四つの類題発句集における芭蕉の〈通り句〉の変遷

右の論文では紙面の関係で、〈通り句〉のすべての本文をあげて分析できなかった。また、類題発句集には異形や誤伝などの存疑句がかなりあったが、これについても考究できなかった。今回は、それらを扱ってみたい。

「通り句」とは『俳文学大辞典』(平成七年刊、角川書店)によると、「連俳用語。また、一般的には誰でも知っている有名な句のことを称す」(深沢了子氏の解説)とある。芭蕉の発句約一〇〇〇句のなかで、特に人口に膾炙した発句を、芭蕉没後の類題発句集(近世中後期に続出した〈題〉によって掲出した発句の撰集のこと)において検証してみた。

次の四書の類題発句集を、対象として調査した。

(1) 蝶夢編『類題発句集』

(中五・安永3(一七七四)年3月刊) 京都橘屋治兵衛ほか三軒刊。春・夏・秋・冬・雑の五部から成る。

(2) 八千坊屋烏編『俳諧十家類題集』

(半五・寛政11(一七九九)年5月刊) 大坂塩屋忠兵衛ほか二軒刊。春・夏・秋・冬・雑の五部から成る。

(3) 一具庵編『俳諧故人続五百題』

(中二・文政12(一八二九)年1月序) 江戸書林の萬及堂・桂林堂の二軒刊。春・夏・秋・冬の四季から成る。

(4) 其残編『俳諧早合点』

(小横一・慶応3(一八六七)年刊、序は明治元年書) 信濃の雪散屋其残蔵書を東都の丁字屋平兵衛ほか、京・大坂の八軒が刊。春・夏・秋・冬の四季から成る。

一 四つの類題発句集における〈通り句〉

(I) 四書全部に掲載されていたのは、前述論文で紹介したように、次の4句であった。(以下、太字は季の詞を示す。)

177 道のべの木槿は馬にくはれけり

(貞享元・41才・野ざらし紀行)

354 はだかにはまだ衣更着の嵐哉

(元禄元・45才・笈の小文)

404 やどりせむあかざの杖になる日まで

(" " " " 笈日記)

809 老の名の有共しうで四十から

(元禄6・50歳・元禄6年10月許六宛書簡)

以上の四句の〈通り句〉の分析は前述論文で行なったので省略するが、蕉風俳諧の真髓を代表するというようなものではなく、「道のべの」の『野ざらし紀行』吟が、やや漢詩を踏まえた飄逸味のある

知られた発句という程度である。初心者の作句例としてやや難しい各の題の模範句として四書に一致して掲載されたのであろう。

(II) 次に、四書のうち三書に掲載されていた芭蕉発句は51句あった。その51句は次の発句である。(※印は重要な異形を示す。)

① 62 夏の月ごゆより出て赤坂や (延宝4・33才・向之岡)

② 192 秋風や藪も鼠も不破の関 (貞享元・41才・野ざらし紀行)

③ 200 馬をさへながむる雪の朝哉 (" " " " 野ざらし紀行)

④ 222 春なれや名もなき山の朝がすみ

(貞享2・42才・真蹟本野ざらし紀行)

※薄霞 (野ざらし紀行)

⑤ 229 山路来て何やらゆかしすみれ草

(" " " " 野ざらし紀行)

⑥ 231 辛崎の松は花より臍にて (" " " " 野ざらし紀行)

⑦ 278 起よく我友にせんぬる胡蝶 (貞享4・44才・己が光)

⑧ 282 花の雲鐘は上野か浅草敷 (" " " " 続虚栗)

⑨ 285 原中や物にもつかず鳴雲雀 (" " " " 続虚栗)

⑩ 309 蓑虫の音を聞に来よ艸の庵 (" " " " 続虚栗)

⑪ 315 星崎の闇を見よとや啼千鳥 (" " " " 笈の小文)

⑫ 320 鷹一つ見付てうれしいらご崎 (" " " " 笈の小文)

⑬ 364 雲雀より空にやすらふ峠かな (貞享5・45才・笈の小文)

※上にて (曠野)

⑭ 373 花ざかり山は目ごろのあさぼらけ (" " " " 小文庫)

⑮ 376 父母のしきりに恋し雛子の声 (" " " " 曠野)

⑯ 378 一つぬひで後に負ぬ衣がへ (" " " " 笈の小文)

⑰ 383 草臥て宿かる比や藤の花 (" " " " 猿蓑)

- ①⑧ 391かたつぶり角ふりわけよ須磨明石 (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 ①⑨ 397五月雨にかくれぬものや瀬田の橋 (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 ②⑩ 416何事の見たてにも似ず三かの月 (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 ②⑪ 424草いろくおのく花の手柄かな (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 (季の詞は草の花。)
 ②② 441御命講や油のやうな酒五升 (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 ②③ 470元日は田毎の日こそこひしけれ (元禄2・46才・真蹟懷紙)
 ②④ 532象潟や雨に西施がねぶの花 (元禄3・47才・ひさこ)
 ②⑤ 615木のもとに汁も鱈も桜かな (元禄3・47才・ひさこ)
 ②⑥ 624地くふときけばおそろし雉の声 (元禄3・47才・ひさこ)
 ②⑦ 640白髪ぬく枕の下やきりぐす (元禄3・47才・ひさこ)
 ②⑧ 659住つかぬ旅のころや置火燵 (元禄3・47才・ひさこ)
 ②⑨ 672大津絵の筆のはじめは何仏 (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑩ 673梅若菜まりこの宿のころ汁 (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑪ 674やまざとはまんざい遅し梅花 (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑫ 685衰や齒に喰あてし海苔の砂 (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑬ 691ほとゝぎす大竹藪をもる月夜 (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑭ 692うき我をさびしがらせよかんこどり (元禄4・48才・勸進牒)
 ③⑮ 703秋海棠西瓜の色に咲にけり (元禄5・49才・葛の松原)
 ③⑯ 741ともかくもならでや雪のかれお花 (元禄5・49才・葛の松原)
 ③⑰ 755ほとゝぎす啼や五尺の萱草 (元禄5・49才・葛の松原)
 ③⑱ 757破風口に日影やよはる夕涼み (元禄5・49才・葛の松原)
 ※唐破風の入りや薄き夕涼 (元禄5・49才・葛の松原)
 ④① 763青くても有べき物を唐辛子 (元禄5・49才・葛の松原)
 ④② 772初雪やかけかゝりたる橋の上 (元禄5・49才・葛の松原)

- ④③ 825芹焼やすその田井の初氷 (元禄6・50才・其便)
 ④④ 841春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑤ 844卯の花やくらき柳の及び腰 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑥ 847目にかゝる時やことさら五月富士 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑦ 849鶯や竹の子藪に老を鳴 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑧ 879ひやくと壁をふまへて昼寝哉 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑨ 881たなばたや種をさだむる夜のはじめ (元禄7・51才・炭俵)
 ※はじめの夜 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑩ 882家はみな杖にしら髪を墓参 (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑪ 887名月に麓の霧や田のくもり (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑫ 906松風や軒をめぐつて秋暮ぬ (元禄7・51才・炭俵)
 ※の ※り (元禄7・51才・炭俵)
 ④⑬ 916鶯や柳のうしろ藪のまへ (元禄7・51才・炭俵)
- 尚、芭蕉発句の本文は、前掲論文と同じく愛媛大学国語国文学研究会編『芭蕉発句・総索引』(昭和五八年三月刊、和泉書院)に拠った。また、異形・出典などは、井本農一・堀 信夫編『松尾芭蕉集①全発句』(平成七年七月刊、小学館)を参照した。

二 51句の三類題発句集に共通な句の分析

先述の四書に共通の発句よりも、三書に共通の発句のほうが、芭蕉発句の〈通り句〉として納得できるものが、多いように思われる。年代的には、延宝4年芭蕉33才の「夏の月」の斬新で機知に富んだ句が初期のものとして一句あるのみで、後は貞享元年41才の『野ざらし紀行』から、貞享・元禄期の40代から51才の最晩年の頃の作品

が多い。特に元禄元年10句、元禄4年8句、元禄7年9句など、『おくのほそ道』前後の発句が多く掲載されている。四季別では、春19句／夏12句／秋12句／冬8句（計51句）
となっていて、歳旦吟や新年の句を含むせいか、春の句が多い。
では、前述論文では代表句のみ挙げたが、今回は51句全部を分類し、さらに考察を加えてゆきたい。

（尚、は名所を示し、または異形の部分を示す。）

① 旅・旅情・名所

●名所

類題発句集

62	夏の月ごゆよりいでて赤坂や	(1)	(2)	(3)	(4)
192	秋風や藪も畠も不破の関	(1)	(2)	(3)	(4)
231	辛崎の松は花より朧にて	(1)	(2)	(3)	(4)
315	星崎の闇を見よとや啼千鳥	(1)	(2)	(3)	(4)
320	鷹一つ見付てうれしいらご崎	(1)	(2)	(3)	(4)
(芳野)					
373	花ざかり山は日ごろのあさぼらけ	(1)	(2)	(3)	(4)
391	かたつぶり角ふりわけよ須磨明石	(1)	(2)	(3)	(4)
397	五月雨にかくれぬものや瀬田の橋	(1)	(2)	(3)	(4)
672	大津絵の筆のはじめは何仏	(1)	(2)	(3)	(4)
673	梅若菜まりこの宿のころ汁	(1)	(2)	(3)	(4)
847	目にかゝる時やことさら五月富士	(1)	(2)	(3)	(4)
●旅・旅情・旅愁					
200	馬をさへながむる雪の朝哉	(1)	(2)	(3)	(4)
378	一つぬひで後に負ぬ衣がへ	(1)	(2)	(3)	(4)

470 元日は田ごとの日こそこひしけれ
659 住つかぬ旅のころや置火燵

② 叙景句・景色

222	春なれや名もなき山の朝がすみ	(1)	(2)	(3)	(4)
285	原中や物にもつかず鳴雲雀	(1)	(2)	(3)	(4)
364	雲雀より空にやすらふ峠かな	(1)	(2)	(3)	(4)
416	何事の見たてにも似ず三かの月	(1)	(2)	(3)	(4)
691	ほとゝぎす大竹藪をもる月夜	(1)	(2)	(3)	(4)
755	ほとゝぎす啼や五尺の菖草	(1)	(2)	(3)	(4)
757	破風口に日影やよはる夕涼み	(1)	(2)	(3)	(4)
772	初雪やかけかゝりたる橋の上	(1)	(2)	(3)	(4)
841	春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏	(1)	(2)	(3)	(4)
887	名月に麓の霧や田のくもり	(1)	(2)	(3)	(4)
906	松風や軒をめぐつて秋暮ぬ	(1)	(2)	(3)	(4)
916	鶯や柳のうしろ敷のまへ	(1)	(2)	(3)	(4)

③ 花・植物（本意をよく生かした花の句）

229	山路来て何やらゆかしすみれ草	(1)	(2)	(3)	(4)
383	草臥て宿かる比や藤の花	(1)	(2)	(3)	(4)
424	草いろくおのく花の手柄かな	(1)	(2)	(3)	(4)
532	象潟や雨に西施がねぶの花	(1)	(2)	(3)	(4)
615	木のもとに汁も鱈も桜かな	(1)	(2)	(3)	(4)
674	やまざとはまんざい遅し梅花	(1)	(2)	(3)	(4)
703	秋海棠西瓜の色に咲にけり	(1)	(2)	(3)	(4)
844	卯の花やくらき柳の及び腰	(1)	(2)	(3)	(4)
④ 都会的なもの・江戸意識					
282	花の雲鐘は上野か浅草敷	(1)	(2)	(3)	(4)

⑤ 隠逸・閑居・孤高

(思想的・観念的・禅的思考・莊
子的思考等を背景とする)

278 起よく我友にせんぬる胡蝶 (○ ○ × ○)

309 蓑虫の音を聞に來よ艸の庵 (○ ○ × ○)

692 うき我をさびしがらせよかんこどり (○ ○ × ○)

763 青くても有べき物を唐辛子 (○ ○ × ○)

879 ひやくと壁をふまへて昼寝哉 (○ ○ × ○)

⑥ 家族への情・家や祖先への意識

376 父母のしきりに恋し雉子の声 (○ ○ ○ ×)

882 家はみな杖にしら髪の墓参 (○ ○ × ○)

⑦ 老い・老年

640 白髪ぬく枕の下やきりぐす (○ ○ × ○)

685 衰や齒に喰あてし海苔の砂 (○ ○ × ○)

741 とまかくもならでや雪のかれお花 (○ ○ × ○)

849 鶯や竹の子藪に老を鳴 (○ ○ × ○)

⑧ 行事・年中行事

441 御命講や油のやうな酒五升 (○ ○ × ○)

881 たなばたや穂をさだむる夜のはじめ (△ △ × △)

△は、はじめの夜

⑨ その他

● 食物

825 芹焼やすその田井の初水 (○ ○ ○ ×)

● 其角の「雉」の句に応じて

624 蛇くふときけばおそろし雉の声 (○ ○ × ○)

以上、四つの類題発句集のうちの三書に共通の発句51句について
考察してみる。再び、分類と句数のみを出してみると、次のように

なる。

① 旅・旅情・名所 (● 名所11句 ● 旅・旅情・旅愁4句) 計15句

② 叙景・景色12句

③ 花・植物8句

④ 都会・江戸意識1句

⑤ 隠逸・閑居・孤高 (思想を背景として) 5句

⑥ 家族・祖先への情2句

⑦ 老い・老年4句

⑧ 行事・年中行事2句

⑨ その他 (● 食物1句 ● 他句に応じて1句)

句数だけを、分類してみると、やはり①旅・旅情・旅愁の句が15句で最も多い。また、叙景句や植物句等の中にも、旅にも分類できる句もあって芭蕉の場合は、やはり創作基盤が紀行周辺にあり、詩作の秘儀が旅と深くかわっていたといえる。特に、先行の二類題発句集である蝶夢編『類題発句集』と屋烏編『俳諧十家類題集』は四季のほかに〈雑〉の部があって、「羈旅・名所」また「送別・留別」に芭蕉の発句が多く、両書共に〈漂泊の詩人〉のイメージが強い。その他〈雑〉では「述懐・懷旧・哀傷・贈答」(十家は「所思」)等も芭蕉の発句が多く、観想的なイメージを形成している。

しかし、四季の部のみの後行の二つの類題発句集である一具庵編『俳諧故人続五百題』や其残編『俳諧早合点』では、〈題〉の下に発句のみが他者の句とともに並ぶので、創作基盤としての紀行はあまり強調されない。状況・時・場・人間関係等の外的要因は排斥され、類題発句集とは〈詩が詩として純粹に陳列される機構〉なのである。

● 名所の句は、その地名の属性が歴史的・民俗的にまた文学的に

イメージ化され、季の詞と地名（歌枕や俳枕）という濃厚なことが十七音中に共存して特別な効果をあげている。『三冊子』において「師の詞にも『名所のみ雑の句にもありたし。季を取り合はせ、歌枕を用ゆる、十七文字にはいささか志述べがたし』とあり、頷ける説であるが、実際の芭蕉の名所の句に雑はほとんどない。

●旅・旅情・旅愁の句は、定住せずに漂泊者としてあることの、正と負の両面を採っている。正の面としては、旅における新鮮・斬新な詩情の発見とすがすがしい解放感、だからこそ、「田ごとの月」ならぬ「田ごとの日」を眺める旅への憧憬となるのである。しかし、負の面としては「置火燵」のごとく心暖まる間もそこそこの次の地へと移動してゆく、漂泊者の寂しさ厳しさのある句をも採っている。

②叙景句・景色の句も多く採られているが、旅・草庵・逍遙等での即興吟が多く、

416 何事の見たてにも似ず三かの月

などは、AをBになぞらえて創作するという「見立て」にたよらずに、自然を描いて行こうという意志表明である。

③花・植物の句は、伝統的な花や近世的な新しい花が、さまざまに採られている。

421 草いろくのおのく花の手柄かな（季の詞は草の花）

この句は数年前にアメリカの某大統領がスピーチの中で引用し、現代の日本人には芭蕉句としてはあまり馴染みがなかったので、逆に驚いたというエピソードがある。堀信夫氏は「知足安分の老荘哲学や柳緑花紅の禅機を開示」し、「日本人より、禅に親しむ欧米人によく知られている」と注解される。

さて、江戸庶民の絵画である「浮世絵」は近世初期の菱川師信の

頃にその名称が生まれ、遊里と芝居町という二大悪所を母胎として開化した。しかし、19世紀前・中期（文政・天保・安政）頃、それまでの役者絵や美人画のみではなく、〈風景画・花鳥画〉の新しい境地が確立していった。

経済の発達や交通網の整備に伴い、近世初期からあった旅への憧れが、一層関心を高めていた。各地の『名所図会』の刊行や、『東海道中膝栗毛』のベストセラー化、道中記・紀行文の刊行などのなかで、葛飾北斎は「富嶽三十六景」（天保2（一八三一）年頃刊）をだし、また安藤広重は「東海道五十三次之内」（天保4（一八三三）年頃刊）をだした。神谷浩氏は、——北斎の花鳥画は、従来の日本の花鳥画は「平穩な四季の推移をことほぎつつ空間を裝飾するか、季節感を出しつつ季節の変化を感じ入り謳いあげる」のが常であったが、北斎は「純粹造形」の世界——といえる——とされた。しかし、「芥子」「鸞と垂桜」「西瓜図」などには、泰平の時代に生き対象の本質に迫る生命感がある。安藤（歌川）広重の風景画について神谷浩氏は、「作品の魅力は雨・雪・夜景にある」「季節の、時間の、天候の移り変わりという点に、広重は敏感であった」といわれ、さらにその花鳥画については「広重の花鳥画に盛り込まれた詩情が、俳諧の季節感を根底に持っていることもすでに指摘されているとおりである」といわれる。広重の「おしどり」「冬椿に雀」「月夜、木賊に兎」などは和歌・発句も書かれ画・文ともに味わう趣向であった。このような近世中後期の北斎や広重等を頂点とする泰平の世の風景画・花鳥画の嗜好という時代背景も、類題発句集の盛行とその題や選句に影響を与えているであろう

④都会的な句・江戸意識の句

西山松之助氏によれば、「江戸っ子」という言葉の文献上の初出は

明和8(一七七二)年であり、「江戸っ子」意識は十八世紀後半に成立したといわれる。

芭蕉が俳諧活動を行ったのは、いわゆる十八世紀半ばの文化東遷(漸)より前のことである。だが、新興都市江戸の文化的魅力はやはり感じていたであろう。

282 花の雲鐘は上野か浅草歟

この発句にまわりつく春風駘蕩たるおどかさは、戦国の世の残滓をかすかに胸底におきつつも、新時代の活況と泰平の時空の穏やかな安堵感を背景としているよう。都会的な江戸を詠むことにかけては、蕉門ではやはり其角が随一である。

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春 (五元集拾遺)

越後屋に絹さく音や衣更 (五元集)

これらの江戸を詠む、活きの良いおどかさはやはり新しい時代の漠然とした町自体の空気によるものであろう。

⑤隠遁・閑居・孤高などの思想的背景のある句は、まさに芭蕉らしい風雅の骨格をもった発句である。

309 蓑虫の音を聞に來よ艸の庵

692 うき我をさびしがらせよかんこどり

879 ひやくと壁をふまへて昼寝哉

「蓑虫」の句は、親友素堂との応答があり、草庵で「聴閑」ことこそ、荘子のいう自得自足の境涯であり、無能にして静なる生をまとうする蓑虫に共感している。「無用の用」の哲学をもつ『荘子』の思想を背景としている。江戸画壇の鬼才、英一蝶との間にこの句をめぐって雅交がある。「うき我」の句は西行の和歌をふまえて、長嘯子や素堂などを思いつつ独居感を披瀝している。「ひやくと」の句は、観念や思想を超越して、飄々とある人間を描写している。これ

らの発句を、近世後期の人々はどう読んだのであろうか。

⑥家族・家・祖先等を意識した句は、芭蕉が故郷喪失者ではないことをよく示している。両親を詠んだ句も、親族との墓参りを詠んだ句も、とても素直な人間感情のまっすぐな思いを吐露している。儒教的な近世社会を持ち出すまでもなく、いかなる時代や社会にも普遍的な親と子、祖先と子孫のあるがままの姿である。

⑦老い・老年の句は、意外に多く採られている。近世の泰平の世は、中世戦乱の世とはちがって、「いかに死ぬか」より「いかに生きるか」を考え得る時代であった。多くの『医学書』や『養生訓』的な書物が刊行され、人生五十年の世であっても「老い」への共感はある者にあつたであろう。

⑧行事・年中行事の句は、あまり採られてはいない。「たなばたや」の句は、異形があるが、季節の推移の定位置を発見していて、おもしろい。芭蕉の時間感覚は磨き澄まされている。以下は、省略する。

三書に共通の51句の芭蕉発句の分析の最後に、(1)(2)(3)(4)の四つの類題発句集のうち、〈×〉のついた箇所をみてみる。

(1) 0 (2) 1 (3) 32 (4) 18 (×の数)

(2)の一句とは次の発句である。

378 一つぬひで後に負ひぬ衣がへ

この句のみ(2)には採られていないが、あとの50句はすべて(1)(2)の撰集に共通である。(3)は51句中約3/5も異なっており、(4)は約1/3が異なっている。

四つの類題発句集における芭蕉発句の掲載は(存疑も含む)次の通りである。

(1)『類題発句集』 芭蕉発句・約280句/約5000句(総句数)

(2)『俳諧十家類題集』 “ 約450句/約4500句

- (3)『俳諧故人続五百題』・約140句／約3355句
 (4)『俳諧早合点』・約85句／約2150句

(1)と(2)は、四季と雑という形式も類似しているが、全体的にはそれほど同じ句を掲載しているわけではない。(2)の芭蕉発句450句という数の多さが、三書共通句をほぼ同一にしているのであろう。(3)は明らかに文政12年という時代から、叙景句を中心に爛熟したおそれからで飄逸味のある句を多く掲載している。(4)も幕末の転換期にあたり、新鮮な叙景句を中心に、名吟はいくつか採っているが、観念的な句はあまり掲載していない。次の句が(3)(4)のみにあるのは象徴的である。

729 葱白く洗ひたてたるさむさ哉 (4)は「上げたる」。

ちなみに、「260古池や」の句は(3)のみ、513「夏草や」の句は(1)(2)のみ、911「旅に病で」の病中吟は(1)のみである。類題発句集の編者の意図がおのずと知られよう。

三 四つの類題発句集における存疑句等の派生

和歌においては、勅撰和歌集は編者が精緻な教養と感性で、撰しまた編集している。その表記・作者などには杜撰は少ないであろう。ところが、近世後期に続出した類題発句集を精査してゆくと、そのなかに存疑句・不明句・誤伝(明らかに他の俳人の作)などがでてきて、国家的編纂と結社や個人の編集との相違に愕然とする。が、しかし近世享楽・泰平の世のジャーナリズムの発生期においては、(「少々のブレのなかであっても、庶民が俳諧を身近に享受することのほうが、先行していたのであろう」。

四つの類題発句集における存疑・誤伝などの発句の混入をみてみたい。

- (1)蝶夢編『類題発句集』 存疑 約6句／芭蕉発句約280句
 (2)屋烏編『俳諧十家類題集』 存疑 約125句／" 約450句
 (3)一具庵編『俳諧故人続五百題』 存疑 約10句／" 約140句
 (4)其残編『俳諧早合点』 存疑 約10句／" 約85句

ここでは、(1)蝶夢と(2)屋烏の場合をみておこう。

尚、存疑句や誤伝については、『古典俳文学体系5・芭蕉集』(昭和四十五年七月刊・集英社)と近刊の尾形仿編『新編・芭蕉大成』(平成十一年二月刊・三省堂)で確認してゆく。特に後者を参照した。

(1)『類題発句集』

(◎は『新編・芭蕉大成』によると、真作の可能性のある発句。)

春 落ざまに水こほしけり花椿

(誤伝の部『芭蕉句選』／一艇・『小弓俳諧集』)

夏 昼見れば首筋赤き螢かな

(存疑の部『芭蕉句選』)

秋 ◎稲妻や海の面をひらめかす

(存疑の部『蕉翁句集草稿』・『蕉翁句集』・『芭蕉翁発句集』)

盆過ぎて宵闇くらし虫の声

(誤伝の部『芭蕉庵小文庫』・

『泊船集』・『蕉翁句集』／^尼松山『俳諧草庵集』)

冬 刈跡や物にまきれぬ蕎麦の茎 (存疑の部『芭蕉句選拾遺』)

ふくとうや鯛も有のに無分別(初五「ふく汁や」で、誤伝の

部『芭蕉句選拾遺』・『俳諧古選』)

(2)『俳諧十家類題集』

春 一僕とぼく／＼ありく花見哉 (誤伝の部『俳諧十家類題集』

／季吟『山の井』)

夏 飯櫃にかけもたらぬか蟬の声 (誤伝の部『俳諧十家類題集』

／其角『五元集拾遺』)

下闇や地中ながらの蟬の声 (誤伝の部『俳諧十家類題集』)

秋 嵐雪『俳諧勸進帳』『猿蓑』『玄峯集』
山しなの五荷三束や菊の花 (誤伝の部『俳諧十家類題集』)

／許六『篇突』・『宇陀法師』
そのかみは谷地なりけらし小夜碓 (誤伝の部『泊船集』)

冬 許六書入れ・『芭蕉句選』／公羽『続猿蓑』
御玄家も過て銀杏の落葉かな (誤伝の部『俳諧十家類題集』)

／李由『韻塞』

難 紀行

関こへて爰も藤しろみさか哉 (誤伝の部『俳諧十家類題集』)

／宗祇法師『あら野』

……以上は、他作者の句。

冬 かけごひに恋のころを持せばや (誤伝の部『俳諧十家類題集』)
↓『深川』所収の「青くても」歌仙中の芭蕉の付句。

……以上は、連句の付句を発句と誤った句。

春 春の夜をうちくづしたる嘶哉

夏 夏の夜を打崩したる嘶かな

(秋 あきの夜を打崩したる咄かな↓定稿)

……同じ句が三季に出ている。(尚、他は省略する。)

以上の二書『類題発句集』と『俳諧十家類題集』における存疑句・誤伝句の掲載を、前書は全六箇所、後書は全体の一部だがみてゆくと、『俳諧十家類題集』があまりに杜撰であって、辟易する。十家の代表句で五千句掲載の形式は良い企画だが、多作家と寡作家の相違や、〈題〉下に句が必ずしもない場合など、短期間の無理な企画であつたろう。また、季を間違えて掲載したり、他俳人の有名な俳書にのる名吟を芭蕉句としたり、不誠実な編集である。編者の屋島は

淡々を祖とする八千房三世の石井屋鳥であり、

いでや、十家の風詞を集むるに時の同じからざる有……………大やうかしらに墨してさ、蟹のいと口をわかつに、幽玄の感慨、しほり、おかしみ、洒落、おのがさまく好むところに随ひ、新古に心を染、温古をさぐり、しかも新しきに基の便りともせめ (寛政十一年・浪華・八千坊序)

この自序の最後にも「這ひのぼる道の階にも」とあり、新古の十家の多様な風雅の心を楽しみつつ、さらに新しい俳諧を創作する糧とせよと、初心者に述べている。

それに対して、『類題発句集』はさすが生涯を芭蕉顕彰に生きた蝶夢の編だけあって、数句の存疑句などは当時であつてはいたしかなかったところであろう。『俳諧故人続五百題』『俳諧早合点』の二書は、簡便なものであるが存疑句・誤伝句は10句ほどである。ただし、表記などは、各書ともに相違があり、近世当時の表記に関する認識の薄さがあらわれていよう。

結 び

通俗では森羅万象色々なものが掃蕩しても掃蕩しきれぬほど難然として宇宙に充ねている。

……………略……………

ただ自分に真なものすなわち人に真なものになって、始めて世間に通用する真が成立するのだから、この切実な経験を誰が見ても動かすべからざる真にもり立てようとするには、これを客観的に安置する必要が起って参ります。

(夏目漱石『文芸の哲學的基礎』)
この地上にある森羅万象を、ゲートは詩人がその手で掬えば「水

晶の玉」になると言った。しかし、たった十七音しかない近世の俳諧の発句が、作者の遙か没後に世に残ることは、至難のわざである。表記や、句形や、あるときには作者名まで誤認されても、芸術的価値あるいは真のあるものは時間の流れのなかで幾世の人々の心に残って行く。芭蕉は、永遠性という時間意識のなかで文学活動をした詩人だと言うが、撰集・紀行・日記・俳文・画賛・揮毫の色紙類など、さまざまなオリジナルな装置・仕掛けからその詩〈俳諧〉を表現した。その発句は、芭蕉生前の最終の定稿あるいはそれを出版した本文で読むことが、最善であろう。だが、芭蕉没後三百年をへて、読まれ続けるためには、近世中後期の類題発句集という多少のブレはあっても〈客観的に他者の句とともに安置する〉装置がある時期には必要だったのであり、それはやがて近代の歳時記へと変貌して行ったのである。

【註】

- 1 ゲーテ「東西詩集」(『世界文学全集15・ゲーテ』所収。井上正蔵氏訳、解説。一九七九年九月刊、集英社)
- 2 拙論「類題発句集における芭蕉の受容——芭蕉の〈通り句〉について——」(『國文91号・関根慶子先生・井本農一先生追悼特集』所収。お茶の水女子大学国語国文学会編、一九九九年八月刊)
- 3 堀 信夫氏解説『新編日本古典文学全集70・松尾芭蕉集①・全発句』

- (井本農一・堀 信夫両氏注解だが、堀氏解説の部分である。一九九五年七月刊、小学館)
- 4 尚、後出する本書「存疑の部」の執筆も、堀 信夫氏である。
小林 忠監修『浮世絵の歴史』(一九九八年五月刊、美術出版社)のⅦ「浮世絵の爛熟Ⅱ(風景画・花鳥画の新境地)」文政・天保・安政(19世紀前・中期／北斎・広重他)の部分の執筆は、神谷裕氏。
西山松之助著『江戸っ子』(一九八〇年八月刊、吉川弘文館)において、西山氏は「江戸っ子」の文献上の初見は「江戸っ子のわらんじをはくらんがしき」(明和8(一七七二)年)であり、「江戸っ子」意識は十八世紀後半に成立したとされた。
安田吉人氏に「俳諧における江戸」(『論集近世文学4』一九九二年九月刊、勉誠社)が元禄前後の江戸俳壇を対象としてあり、また吉田多賀氏「近世俳諧における『江戸』」(『十文字国文・創刊号』(一九九五年七月刊)が卒業論文ではあるが近世全般の俳諧と江戸意識を考察している。
- 6 尾形 仿編『新編・芭蕉大成』(一九九九年二月刊、三省堂)の「発句編」は、旧版(一九六二年一月刊『定本・芭蕉大成』は〈加藤・尾形・矢島各氏〉の執筆であったが、新編は嶋中道則・本間正幸・安田吉人各氏の執筆である。「誤伝の部」は、「一、偽書簡にのみ所出する句は、偽作と断じて省いた。」とある。
- 7 夏目漱石著「文芸の哲学的基礎」(漱石の講演は、明治四〇年二月東京青年会館におけるもの。／解説・瀬沼茂樹氏、一九七八年八月刊、講談社学術文庫293)

A Study of the Receptivity of "Basho's Haiku" in Ruidai-Hottkushu: Especially about "Basho's Famous Haiku" and His Spurious Haiku—Shoko Azuma

キーワード 芭蕉の受容 発句 存疑句 通り句 類題発句集

(Japanese Language and Literature)